

## [教育講演]

## 『医学史事典』が語る医史学の世界

坂井 建雄

順天堂大学保健医療学部

現在の高度な医療をもたらした近代医学は、古代以来の西洋医学の歴史の歩みの中から生まれた。古代ギリシアのヒポクラテスは子弟や弟子に医学を教え、彼らの著作70編ほどが『ヒポクラテス集典』として伝承されている。古代ローマのガレノスは解剖学を基礎として古代の医学を集大成・理論化し、多数の著作を著した。ヒポクラテスとガレノスの医学文書は、中世以後のヨーロッパの大学で医学教育の教材として用いられ、18世紀以前の西洋伝統医学の理論的な基礎を形作った。19世紀初頭にヒポクラテスとガレノスの全集を編纂したドイツのキューン Kühn, KG (1754–1840) にとって、古代の医学文書は同時代の医学に役立つ教材であって、歴史研究の対象ではなかった。歴史上の医学を研究対象とする医史学は、いつから始まったのだろうか。その後の医史学の歩みの中で、医史学者たちは医学の歴史をどのように描いてきたのだろうか。

1830年代からドイツではヘッカー Hecker, JFC (1795–1850) とヒルシュ Hirsch, A (1817–1894) らが歴史上の疫病や民間病を研究するようになった。1840年代からはシューラン Choulant, L の『医学歴史文献目録』(1842)、『解剖図の歴史と書誌』(1852) など、歴史上の医学文献の書誌、医師の伝記が著されるようになった。「医学史」を表題とする著作はそれ以前からあったが、医史学が生まれたのはこの頃と考えてよいだろう。

ドイツの医師ヴンダーリヒ Wunderlich, CRA (1815–1877) はチュービンゲン大学医学部を卒業(1837)し、パリとウィーンに遊学して実証的な医学に目覚め、チュービンゲン大学の員外教授(1843)、正教授(1846)、ライプツィヒ大学教授(1850)を務めた。彼の『医学の歴史』(1859)は1858年の医学史講義の記録で、ギリシア・ローマの古代から19世紀前半までの医学の歴史を年代順にまとめている。

日本の医史学では、先哲を顕彰するのが伝統である。1892年に富士川游らは私立奨進医学会で杉田玄白ら先人の偉業を顕彰し、日本医史学会の源流となった。富士川游の『日本醫學史』(1904)は、医学の歴史研究を「医史学」と名付け、太古から明治時代までの医学を年代順に記述した。

イギリスの医史学者シンガー Singer, C (1876–1960) は、ロンドン大学とオックスフォード大学で動物学と医学を学び、臨床医として働いた後、1920年にロンドン大学の医学史講師、その後、米国と英国で医学史の教育・研究に従事した。彼は『解剖学の進化』(1925, 邦訳1983)、『医学小史』(1928, 1962, 邦訳1985–86)などを著し、解剖学と医学の発展の過程を踏まえた時代区分を行った。

ドイツ生まれのアッカークネヒト Ackerknecht, EH (1906–1988) は1930年代までトロツキストとして活動、1933年ナチス政権下に米国に亡命し、ウィスコンシン大学医史学教授などを務めた。彼の『医学小史』(1955, 邦訳1983)では、歴史上の医学を4種類(①図書館医学：中世～15世紀、②病宅医学：16～18世紀、③病院医学：19世紀初期～、④実験室医学：19世紀中葉～)に分類した。

イギリスの歴史家ポーター Porter, R (1946–2002) は、ケンブリッジ大学で歴史学を学び、地質学の歴史で学位を得て、1979年からウェルカム研究所(ロンドン大学)で医史学を教え、1993年から教授、2002年に退職した。彼の編纂した『ケンブリッジ図説医学史』(1996)では、時代を区別することなく、重要なテーマを選んで、専門家が分担執筆をしている。

坂井は『図説 医学の歴史』(2019)を上梓した。最近の医学の急速な発展を踏まえて、医学の発達を

4つの段階(①西洋古典医学:古代~15世紀,②西洋伝統医学:16~18世紀,③近代医学:19世紀~1980年代,④精密医学:1990年代~)に分けた。

19世紀から始まった近代医学の発展には、いくつかの節目がある。①19世紀初頭からの病理解剖により臓器の病変が発見され、疾患と症状が区別されるようになった。②19世紀中葉の全身麻酔と消毒法により、外科学は大いに発展し黄金時代を迎えた。③19世紀末の病原菌の発見により、細菌学は基礎医学の最先端の研究領域となった。④20世紀中葉には抗生剤の登場により感染症がほぼ制圧され、死亡原因の順位が大きく変動した。そして1990年代以降は、医療画像技術(CT, MRI)の登場により死後ではなく生体での診断が可能となり、精密な医療が標準治療として整備され、治癒率の高い医療が国民に普及した。

1830-40年代に医史学が成立して以後、医史学者たちはそれぞれの時代の中から過去の医学を眺め、医学の歴史を記述してきた。その歴史記述の内容や枠組みには当然ながら、医史学者の生きる時代の医学と社会の状況が反映されている。

2022(平成4)年7月25日に日本医史学会設立95周年を記念して、日本医史学会編『医学史事典』が刊行された。A5判で836頁、内容は5部に分かれ、医学の古今と東西、医学と社会をバランスよく見渡している。見開き1項目の中項目で構成され、活字主体で興味深く読んでもらうことを編集コンセプトにしている。学会員を中心に専門的な学識を持つ著者に執筆を依頼し、日本医史学会が責任をもって編集にあたった。

医学は人々の健康と生命を守る営みであり、文明の発祥とともに始まり、あらゆる地域・社会に存在している。医学の歴史は、医療を提供する医師・医療者の歴史であるだけでなく、医療を享受する民間・社会の歴史でもある。その原初の形は経験知をもとにしたり、宗教と結びついたりしていたが、哲学と結びついて一定の理論体系をもつようになり、やがて科学・技術と結びつきを深めて、高度な現代医学へと発展してきた。医学・医療は、あらゆる時代・地域において、それぞれの社会や文化と深く関わり、薬学や生物学など周辺分野と共鳴しあい、さまざまな病気を経験・認識・克服し続けてきた。『医学史事典』は、医学・医療の専門職にとっただけでなく、社会の多くの人々にも意味深いものであると考える。